

目 次

はじめに——いま、なぜ魯迅か

10

第一章 一九〇四年秋、仙台

19

「幻灯事件」と石原莞爾

藤野先生との「惜別」

第二章 エスペラントに肩入れした魯迅と石原莞爾

29

独裁国家にとつての「危険な言語」

同級生Kが抱いた希望

第三章 満州建国大学の夢と現実

37

石原莞爾の満州建国大学論

五族協和というたてまえ

「蒙古放浪歌」

第四章 上野英信の建大体験

建国大学の夢と現実

経歴を隠した卒業生

魯迅に傾倒した上野英信

49

第五章 故郷および母との距離

斎藤「野の人」の影響を受けた魯迅

「天皇の後ろにおふくろがついてくる」

「革命」にとつての最大の障害物

61

第六章 魯迅とニーチェの破壊力

ニーチェの「超人」思想に惹かれた魯迅

「昼の光に夜の闇の深さがわかるものか」

71

第七章 死の三島由紀夫と生の魯迅

生よりも死を重視する人たち

三島自裁の裏側にあったもの

79

第八章 夏目漱石への傾倒

漱石の旧居に住んだ魯迅

馬ではなく牛になれ

91

第九章 中野重治と伊丹万作の魯迅的思考

『村の家』と転向

「戦争責任者の問題」

101

第十章 久野収と竹内好の魯迅理解

竹内の思想の核

113

「正門主義」への批判

竹内好への追悼文

第十一章 竹内好の太宰治批判とニセ札論

太宰への怒り

竹内のニセ札論

疑うことの大切さ

129

第十二章 魯迅の思想を生き、むのたけじ

揺るぎなき本物の思想

むのたけじの戦争責任

新聞人・信夫韓一郎

私の人生を決定した、むのたけじ

怒りの炎を燃やし、命がけで生きた

141

第十三章 魯迅を匿った内山完造

「友人を敵に売り渡さない日本人」

毛沢東の大げさな讃辞

「中国は私を必要としているのです」

魯迅と完造との出会い

完造と美喜の履歴書

魯迅の急逝

第十四章

魯迅の人と作品

許広平との往復書簡集『両地書』

根本の思想は仇討ち

『『フェアプレイ』は時期尚早』

魯迅は永遠の批判者である

*魯迅の作品の引用は、主として『魯迅選集』（増田渉・松枝茂夫・竹内好編、岩波書店）に拠った。
*引用文中、今日の人権意識に照らして不適切と思われる表現があるが、原典の時代性を鑑み、原文のままとした。

はじめに——いま、なぜ魯迅ろしんか

一九七七年秋に出した最初の著作『ビジネス・エリート意識革命』（東京布井出版、のちに『企業原論』と改題して現代教養文庫）を私は次のように結んだ。

「竹内好よしみは『ドレイとドレイの主人はおなじものだ』という魯迅のするどい警句を引きながら、ドレイは、人に所有されることによって、自由ではない。しかし、ドレイの所有者もまた、所有することによって自由ではない。したがって人間の解放は、ドレイがドレイの主人にのし上がることによってではなく、人が人を支配する制度そのものを改革することによってしか実現しない、と述べているが、現在の企業という封建社会、あるいはドレイ社会の改革も、この方向によってしかなしえないのである。そのためにもまず、ドレイ精神からの脱却が主張されなければならない。

現在の企業という封建社会の中では、上司の命令に黙従する社員になることも、部下に専制権力をふるう社長になることも、同じく『精神のドレイ』になることなのだという視

点に立って、ドレイ精神からの脱却を図ることが『企業人革命』の出発点であり、また到達点だからである」

「会社国家」であり、「官僚国家」でもある日本では、いま、ドレイが主人の意向を先取りする忖度そんたくが大流行りおおはやだが、その意味では「企業人革命」は「日本人革命」ともなる。

その有効な武器として魯迅の思想を、改めてクローズアップしてみたい。私にとって魯迅は思想の原郷であり、魯迅を振り返ることは自分の生の軌跡を振り返ることである。

ニーチェは「神は死んだ！」と叫んでキリスト教に反逆したが、魯迅は儒教に徹底的に抵抗し、その教えをひっくり返した。

たとえば、魯迅に傾倒したジャーナリストのむのたけじは、河邑かわむら厚德著『むのたけじ笑う101歳』（平凡社新書）の中で、魯迅に「最も惹ひかれたのは、論語を真つ正面から敵視したことだな。孔子を真つ正面から叩たたいたのが彼で、私も本当にそうだと思ったの」と告白し、「左の端にも右の端にも行くな、真ん中で行くのがいい道德だ」という『中庸』はおかしい、と続ける。そして、こう結論づける。

「私は貧乏人の子で、権力支配を受けてきて、それはとんでもないと思っていた。

貧乏人が問題を突き詰めて考えて勝負してこそ、世の中を変えられる。真ん中でプラプラやっているのはごまかしだと思ってね。だから私は孔子の論語はごまかしだと思っている」

誰もが疑わない「親孝行」でもそうである。たとえば、森友学園が運営する塚本幼稚園では、園児に教育勅語を暗唱させていた。そして、「安倍首相がんばれ」と叫ばせていたのだが、「親を大切に」はそんなに当然のことなのか。

尊属殺重罰、つまり親殺し重罰は、私は戦後すぐになくなったと思っていたら、一九七三年まで続いていた。

実の父親から性的虐待を受けて子どもまで生まれ、遂に父親を殺してしまった娘にも尊属殺重罰が科され、それは憲法違反だという判決が一九七三年に最高裁で出た。それではじめて尊属殺重罰はなくなったのだが、この例を前にしても「親を大切に」のような教育勅語的なことが言えるのか。

魯迅の『朝花夕拾』に「二十四孝図」が入っている。これは儒者が二十四人の孝行者と

される歴史上の人物を絵入りで解説した通俗本について、否定的に書いた評論である。

その中の一つに「郭巨、児を埋む」がある。

ある子どもが母親の腕に抱かれてニコニコ笑っているが、彼の父親は、いましも彼を埋めるために穴を掘っている。その説明に言う。

「漢の郭巨、家貧し。子あり、三歳なり。母かつて食を減じて之に与う。巨、妻に謂って曰く、貧乏にして母に供する能わず、子また母の食を分つ。盍ぞ此を埋めざる？」

「坑を掘ること二尺に及んで、黄金一釜を得。上に云う天、郭巨に賜う、官も取ることを得ず、民も奪うことを得ず、と」

この話を引いて魯迅はこう考える。

「私は最初、その子どものことが気がかりで、手に汗を握った。黄金一釜が掘り出されて、やっとホッとした。だが私はもう自分が孝子になる気がなくなつたばかりでなく、父が孝子になったら大変だという気がした。そのころ私の家は左前になつていて、父母がしょっちゅう食いぶちの心配をしているのが耳にはいった。それに祖母は年老いている。もし父が郭巨のまねをする気になれば、埋められるのはこの私ではないか。もし郭巨のときと同

様に一釜の黄金が掘り出されれば、むろん、この上ない仕合せである。だが、そのころ私はまだ小さくはあったが、世の中にそんなうまい話はザラにあるものではない、というくらいちえの智慧はあったと思う」

つまり、貧しくて母親に食を与えることができないので、自分の子どもを埋め殺してしまふのは当然であつて、それが親孝行の道だと儒者は説くのだが、魯迅は、自分の父親が郭巨のような孝行息子だったならば、自分が埋められてしまふ立場になるといふ、子ども時代の恐怖を語っている。

日本でも、特に戦争中の天皇制教育は、教育勅語に象徴されるように、上から下への儒教的イデオロギーだったが、しかし、道徳は上から押しつけられた途端に腐ってしまう。それは自発的なものではなく強制的なものになり、道徳ではなくなるのである。

反戦川柳作家の鶴彬あきらは「修身にない孝行で淫売婦」と、娘を身売りさせた親を風刺したが、魯迅は修身こそが淫売婦にさせるのだと読み破った。

戦争下の教えでは、国民は「天皇の赤子」だといわれた。つまり、親孝行は天皇孝行に

つながり、国民の生命は二の次、三の次だったのである。

「報復」も儒教的には否定されるだろう。しかし、裁判所までが権力に支配され、法が公平に適用されない時もそれは否定されるべきなのか。魯迅は報復を否定しない。復讐ふくしゅうでさえも否定しない。

『日本の魯迅』ともいわれた竹内好は、『魯迅評論集』（岩波文庫）で、魯迅についてこう書いている。

「苦しくなると、とかく救いを外に求めたがる私たちの弱い心を、彼はむち打って、自力で立ちあがるようにはげましてくる。彼がとり組んだ困難にくらべれば、今日の私たちの困難はまだまだ物の数でないのだ。これしきの困難に心くじけてはならない。ますます知恵をみがいて、運命を打開しなければならぬ。魯迅は何ひとつ、既成の救済策を私たちに与えてくれはしない。それを与えないことで、それを待ちのぞむ弱者に平手打ちを食わせるのだが、これ以上あたたかい激励がまたとあるだろうか」

努力すれば必ずそれは報われる、という考え方がある。「苦あれば楽あり」という因果応報的世界観だが、これは「苦あれば楽あるう」、これだけ努力すれば必ず報いられるだ

ろうという祈りにも似た願望が短絡したものであり、^レ現実^クは「苦あつても必ずしも楽あらず」である。

それではそれこそ報われない、と言う人がいるかもしれないが、見当違いの努力もあるだろうし、どう努力しても浮かび上がれない人もいる。たとえば、魯迅が「故郷」で描いた閩土は^レ努力^クしなかつただろうか。

そう前提した上で魯迅は「報復の論理」を展開する。

「花なきバラの二」は、一九二六年三月十八日、中国の時の軍閥政府によつて多くの青年が虐殺された「民国以来最も暗黒の日」に書かれたものだが、

「これは一つの事件の結末ではない、一つの事件の発端だ。

墨で書かれたタワ言は、血で書かれた事実を隠しきれない。

血債は必ず同一物で償還されねばならぬ。支払いが遅れば遅れるだけ、一そう高い利息をつけねばならぬ！」

という激しい文字で綴^{つづ}られている。

報われ難い^レ現実^クがあるからこそ、「報復の論理」は必要なものであり、「血債」は「償

還され」ていないからこそ、必ず「償還されねばならぬ」のである。

「挫折」は多く、これだけ努力すれば必ず報われるだろうという「期待」と「現実」を取り違えたところから生まれる。そこには当然、無意識的にもせよ己れの力に対する過信がひそんでいる。

私が名づけた「まじめナルシズム」の腐臭はそこから立ちのぼる。

魯迅がそうした腐臭と無縁なのは、己れの力などなにほどのものでもないことをハッキリと知っているからであり、「努力」が報われ難い、現実であるからこそ、「絶えず刻む」努力が必要であることを知っているからである。

「私は人をだましたい」や『フェアプレイ』は時期尚早」といった魯迅の刺言を読んで、私は「至誠天に通ず」式のマジメ勤勉ナルシズムから自由になった。

マジメ主義者や「誠実」讚美者（とかくこれらの「主義者」は他人に対するマジメや誠実より己れに対するそれを優先させる）は、よく「眞実」を他人に預けて（「告白」！）、自分の重荷を軽くする。

竹内好は「日本文学にとって、魯迅は必要だと私は思う。しかしそれは、魯迅さえも不要にするために必要なので、そうでなければ魯迅をよむ意味はない」と喝破した（『新編魯迅雜記』勁草書房）。日本文学にとってだけでなく、日本人にとって魯迅が必要なのだと思うが、学生時代に私は友人に、日本人にはマルクスやらウエーバーよりも魯迅を読むことが必要だという手紙を書いたことがある。

魯迅は、とりわけ卑屈なドレイ根性、ドレイ精神を排した。聖人君子が嫌いな魯迅はこんなことも言っている。

「私は天国をきらひます。支那に於ける善人どもは私は大抵きらひなので若し将来にこんな人々と始終一所に居ると実に困ります」

「長いものには巻かれる」で、多数に従う「いい人」ばかりのこの国には、いまこそ、魯迅という精神の爆薬が必要だと私は思う。魯迅は夏目漱石の影響を受けた。逆に魯迅に影響された人には中野重治や竹内好、そして、むのたけじなどがある。危険を冒して魯迅を助けた内山完造を含め、「魯迅と日本」という角度から魯迅の思想を語りたい。最初の場面は魯迅と石原莞爾かんじが交差した「一九〇四年秋、仙台」である。